あさ 11

2020

須賀忠男のBird Note

年に一～二回
見る事がある
アオジ
食事時は地面に
下りて啄ばむ
ガサ・ゴソと…

あを

十一月集

佐藤喜孝

雑詠

淺蜊パスタせうがないので箸を割る

麥刈終へポプラ一樹を芯に立て

唐黍のあをあを地平の向ふまで

影あるは波ばかりなり夏の沖

金蚕のたたみそこねし翅のまま

こぬか雨突いてひととき秋のてふ

子山羊のあたり殊に多くのあかとんぼ

旬

赤座　典子

短冊の濃き色ゆかし秋風鈴

ほろほろと食む利平栗黄金色

利酒に先づは限定ひやおろし

酒蒸しの白き目玉や秋の鯖

稲束を乗せてリフトの廻り来る

越後土産身のかっちりと秋茗荷

山寺

秋川　泉

新栗やひと山越えて買ひにゆく

初栗の飯炊く朝ぞ張り切りて

初栗飯母に供へる雨の朝

にぎにぎし墓地への道の秋の蝉

呼び止めて話しこむ道彼岸花

境内のぽっぽと燃える曼殊沙華

梵鐘の響く山寺朝や秋

月笑ふ

大日向幸江

家一軒のみ込む川や鰍泣く
モノクロに写るカメラや彼岸花
健康器使ひし吾に月笑ふ
蜩の記憶の底の深い穴
校長の駆け足遅く運動会
久びさにカッコウの声吾が町に
いかづちの山駆け降りる龍の如

秋模様

七郎衛門吉保

金色の歌留多敷き詰む稲田かな
刈田道麒麟模様の見え隠れ
露天の湯肩に触れそな秋海棠
秋海棠遊び相手の鯉背びれ
信濃路や路傍にもある蕎麦の花
風芒外湯の月の右左
妻と夫孫に描かれる敬老日
渦中にも酔を忘れず酔芙蓉

金木犀

篠田　純子

雨あがり金木犀の香の重し

カタン糸五十番ミシンかたぐわた日永

腹にズン予告なしなる大花火

四阿の軒よりミスト昼の虫

部屋片づけちゃんかちゃんかリモート盆踊

「残菊」抄（二）

篠田　大佳

深呼吸して電車待つ秋の朝

直面（ひためん）の人と行き交ふ秋の雲

秋愁黴蒸す地下の商店街

秋時雨嘔吐するまで優等生

残菊やみんなの理想になれなくて

九月

須賀　敏子

白猫の後ろ姿や曼殊沙華

雨催ひ茎の撓りて曼殊沙華

朝顔の紺の深さや今朝の庭

つきたての新米指に温かし

箱入りの南瓜十キロ玄関に

秋の燈や「一句悠々」声出して

秋灯下コロナ禍の記事探してる

画布伸べて夫は九月で傘寿なり

守宮

田中　藤穂

おう守宮まだこの家に棲んでゐたか

頭北面西深夜の梅雨を聴いてをり

電話帳の友みなあの世風の盆

細道はかつて旧道葛の花

洗濯物とりこむ竿に赤とんぼ

秋祭

長崎　桂子

風向きや樹と屋根下り頬に秋
稲の花戦後開墾海ちかし
海風と芥に育つ自生菊
秋暑し庭の仕事に疲れけり
虫すだく夕べ今宵も賑賑し
秋祭奉納提灯人疎ら
境内の夜店少なき秋祭
梨を剥き朝日に今日を始めたり

夕蜩

森　なほ子

夕蜩風待ちがほの梢の葉
来る人の絶えし山荘蝉時雨
カンナ燃え好きなことだけする日かな
星月夜昼見し山のシルエット
もう少し提げておかうか秋簾
秋暑し部屋半ばまで朝日さし
薄き物重ね掛けして秋の雨
信濃鉄道野菊の帯となりゆける

前月抄

天球の星それぞれにうごめける　佐藤　喜孝

終点まで一人も降りぬ暑さかな　森　なほ子

籠りゐる長崎の忌の深呼吸　赤座　典子

建て売りの明かりがともる晩夏かな　秋川　泉

籐寝椅子眠りの森に入りけり　大日向幸江

渡されるバトンの重し長崎忌　七郎衛門吉保

網戸越し夫とすずめの会話密　篠田　純子

母方の墓白菊が二輪挿し　篠田　大佳

ビル未だ広き空地に鶏頭花　須賀　敏子

蝉の声夜はいつしか虫の音に　田中　藤穂

頂上へなだらかにして釣鐘草　長崎　桂子

九月号作品より　赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

解體のはじめは棚の青ぶだう　佐藤喜孝

この家の解体は、まず青葡萄のなっている棚からとなった。何年もの丹精の結果、葡萄棚のある家という、素敵な風景が作り出されていたのに、その葡萄棚から、解体されることになるとは。昨今は、世代交代、過疎化などのためか、まだ十分に機能するものや、趣のある風情が、気が付くと消えてしまっている。とても残念である。（典子）

青大将波紋を残し向う岸　須賀敏子

青大将は、全長一〇〇～二〇〇センチメートル、胴の直径は五センチメートル、日本固有種で本土の蛇では最大、無毒。とインターネットにありました。その青大将が、悠々と向こう岸まで泳いで行ったのを、敏子さんは見送られたのでしょう。いくら毒を持たないとはいえ、こちらに向かってきたのでは、やはり怖しいですよね。「向こう岸」でホッといたしました。（典子）

蛍を見し日の遠し夫遠し　田中藤穂

とてもしみじみとした句です。以前の句会では、ご主人の都合で、早くお帰りになることがありました。そのような日々をも、今は沢山の思い出の引き出しとして，ほかの人には出来ない句を沢山作られている藤穂さん。藤穂さんの句は、私達へのエールです。よろしくお願いいたします。（典子）

雪渓は巨大雄鶏となりに貂　森なほ子

雪解け時の山肌に現れる雪形は、様々の形に見えます。白馬岳の大雪渓の「代掻き馬」も有名ですが、作者は、大きな雄鶏と貂が並んでいる雪形を見つけました。毎年変わらず現れる形や、その年だけに見られる形、この雄鶏と貂は、来年はどうなるのでしょうか。雪の白さが映える、大きな景色を、楽しむことができました。（典子）

空腹のきみの夢見て朝の夏　篠田大佳

大佳さんの夢に出てきた「きみ」とは？　時々一緒に食事をしている方？　などとお節介な想像をしてしまいました。そして、その後の展開も気になってしまいました。このような句を詠むには程遠くなってしまった身としては、大佳さんの若さに、素晴らしい！　益々楽しみ！　と申し上げ

ます。（典子）

蛇口から昭和の音か秋の聲　　佐藤喜孝

令和時代の蛇口の音は？と台所と洗面所で蛇口を捻り、水を流してみた。ステンレスシンクの台所では、初めにボトンと水の当たる音がして、その後はスウーウ。セラミックの洗面器では、スーゴニャゴニャと柔らかな音。作者の捻った蛇口からは、ジャージャーが聞こえたのではなかろうか。さらに蛇口の締まりが悪く、ピチャンピチャンもあると、正しく昭和の音になる。（吉保）

紫陽花や雨の波紋の手水鉢　　秋川　泉

この句からも昭和を含め、大正・明治・はては江戸まで遡った、仕舞屋の景色が見えてくる。どこの家も押し並べて、厠は北西の角にあり、北廊下を通って用を足しに行く。北廊下の雨戸は簡単に開け閉めが出来、用足しの後で、庭に設えられた台の上の、銅の手水鉢を使う。目の上には、手拭きが掛けてある。紫陽花は裏庭がよく似合う。この時期の雨が、手水鉢にも落ちている。（吉保）

マスターは浄土真宗琵琶涼し　　篠田純子

お寺さんやお坊さん方にとって、多角経営は今や当たり前のこと。築地の浄土真宗総本山西本願寺にも、その一端を見る事ができる。ベッド設えのホテルの様な宿泊施設を持ち、併設されたバーでは、お坊さんがシェイカーを振っているのではと思わせるほど。ガラス張りのレストランとショップも併設されている。私は歎異抄を購入した。今風に分かりやすいような気がしたので。（吉保）

夏帯に母の残り香オーデコロン　　大日向幸江

和服ショップのスタッフさんから「男の着物に香水とかの類はなしですよ」とアドバイスされた記憶がある。女性の場合の扱いはどのようになるのだろうか？汚れたり汗ばんだりした長着の類は、洗いに出すなどしてメンテナンスをする。しかし帯の類の洗いは聞いたことがないので、作者は母上の香りを夏帯に見つけたのだろう。自分の帯はと嗅いでみると防虫剤の匂いだった。（吉保）

梅雨寒や志野焼茶碗愛で啜る　　長崎桂子

我が家の水屋には、どんな焼き物が収まっているのか覗いてみた。瀬戸焼・京焼・砥部焼・無名異焼・楽焼・萩焼・そして美濃焼の志野焼と織部焼。我が家では水差しが志野焼だった。志野焼は

厚めの素地で形作られ、そこに厚めに釉薬を施して焼き上げられる。そこで、もっこりとした感じではあるが、肌触りの優しい器になる。梅雨時の気分転換には最適かもしれない。（吉保）

しなやかに波紋を染める錦鯉　　赤座典子

句会で拝見した時の印象を脱ぎ捨て見事な孵化をされた。典子作品の十指に必ず入る佳品になった。この句の前で言を弄する必要はない。（喜孝）

家居出て箱眼鏡めく季語探し　　七郎衛門吉保

吉保俳句はいつもアイデアが詰まってゐる。今度はどんなアイデアが登場するかと楽しみである。コロナなどで長く外出をされてゐなかった時など、外に出ると空気、風、外光、匂、音などすべて新鮮に感じる。作者は俳人、一句ものにせんと鵜目鷹の目で首をめぐらす。〝箱眼鏡〟とは！。いつも触れてゐた町の光景が久しぶりの外気に触れる感覚を見事に捉えてゐる。（喜孝）

佐藤喜孝

稲妻の独り舞台の小気味よし
太き鯉白き腹見す水の秋
秋澄みて四方にわたる槌の音　　赤座典子

◎天空を我が物顔に光と音で威嚇する稲妻、まさに雷神のお出ましである。典子さんも鬱屈したものがあったのだらうか。「小気味よし」は正に小気味よい。宗達ゑがく雷神を見ると鳴物は肩に担いだり手に持ったりしてゐるが、稲光はだうするのかわからなかった。
○腹の白い鯉、白い錦鯉のことだらうか。敏子さんも〝秋の風〟を〝風は秋〟として表現されてゐ

る。ひっくり返すことで新鮮に思へるから不思議。
○槌音は荒野を拓くときや、家が建つときの音である。機械の音ではない、人が作る音である。喜びの音でもある。四方に響き渡ってゆく。槌音をもって秋の気が澄むやうでもある。

秋川　泉

夢想する月下美人や咲ききらず
クローンか月下美人の香にむせる
たまゆらの月下美人の香も消ゆる

○夢想してゐるのは月下美人。咲ききる前の夢想と云ふところが面白い。いや「咲ききらず」咲けなかったときにも使ふ。月下美人は一夜花。朝には萎むといふ。そんなことにも「夢想」は活きてくる。花そのものにも魅かれるが名にも魅かれる。「月下美人」の名付け親はどんな方だったらう。
○クローン植物があるといふ。この月下美人はどちらなのかと思ひつつもその花の香にむせてゐる。クローンかクローンでないかは鑑賞者には分らないが花の美しさに変りはない。が少々拘ってゐる泉さんである。
○わたしは月下美人を手元で見たことがないので想像するだけだが、と書いていや孔雀サボテンを育てたことがあったなと思ひ出した。調べてみると似て非なる物のやうだ。香りも花の開花時間も

違ひがある。やはり想像するだけだ。「たまゆら」に泉さんの花を惜しむ気持ちが十二分に感じられた。因みに夜に咲く月下美人の香は蝙蝠を惹き寄せるためださうだ。

大日向幸江

吾亦紅絶えて久しき同窓会
赤とんぼほどほどの陽の中に
夜店恋しや止められた盆踊

○気がつくと同窓会が開かれなくなって久しい。なぜだろうかと幸江さんは訝しみつつ懐かしむ。季語ゆゑか女学校を想像した。「吾亦紅」が句に品格をもたらしてゐる。
　読後、わたしもいつの間にかクラス会の案内が来なくなってゐることに気がついた。今なら会ってみたい気がする。会って酒を酌み交す。取り立てて話すこともなく時を過ごしてなんとなく別れる。などと想像してしまった。
○この破調は成功してゐないやうだ。「ほどほどの陽の中に泛く赤とんぼ」などでは。
○盆踊を止められた原因が分からないとすっきりしない。「コロナよ」と云はれても句からは判然とはしない。時の流れの中に生じた句。わかるやうに作るのは難しいと自戒した。夜店・盆踊との

季語は整理が可能。

七郎衛門吉保

アフリカに飛蝗の跋扈威と異の世
ＧＯＴＯで少し晴れ間と秋の風
句作りのスマホに移す秋の花

○飛蝗の大量発生のニュースを聞く。吉保さんはその事柄をきっかけに言葉で遊ばれた。ＢＡＴＴＡ＝ＢＡＫＫＯ・Ｉ＝Ｉと耳で聞くと同じやうな音の言葉を並べて楽しまれた。
○コロナをきっかけに次々言葉が生み出される。ことがことだけに趣はない。社会に活気が出てきたやうだがと吉保さんは思ひつつも「秋の風」と頼りなさを思ふのであらう。
○何回も読んだ。「句作りをスマホに移す」だと〝今まで紙と筆記用具で句作りをしていたが今はスマホで句作りをする〟と読めるが。また「スマホに写す」だと句作りをしてゐるスマホに句材の秋の花を撮ったと読めるのだが。

篠田大佳

二の腕が白露の今を告げてゐる
マスクに曇る手柄話や秋の風
四つ打ちが耳に残りて虫のこゑ

○能村登四郎は「今日白露衣まとふ間の裸身に」と全身で白露の候を感じてゐる。大佳君は二の腕に白露の候を覚えたと。まだ夏の名残のむき出しの二の腕、「告げてゐる」が雅で「白露」に適ってゐると思った。二の腕は上膊部であるが日葡辞書には「肘から手首までの部分」と書かれてゐるとのこと。ここではだうでもよいことだが調べたついでにちょっと。
○「マスクに曇る」と云へばメガネ。口角泡を飛ばしての手柄話でメガネも曇らうといふもの。話に乗りきらぬ作者は「秋の風」と。どこ吹く風といふ感じ。
○カネタタキのやうだ。きっと楽しみに数へたのだらう。四つで止んでしまった。後を聴きたいとの心残りも感じられる。

須賀敏子

図書館へ自転車漕げば風は秋
図書館へ遠廻りして曼殊沙華
秋灯下今日も一冊読み切って

○俳句は重ければよいといふ訳でもない。敏子さんはそのをりをりの心に沿って句を詠まれる。自転車は便利な乗り物。自転車を漕ぐと風が生まれる。風もいつの間にやら秋になってゐた。
○楽しい寄り道である。今年のあそこの曼殊沙華はだうなってゐるかしらと、期待に心弾ませての遠廻り。
○日毎に一冊本を読み切るとは大変な読書家である。敏子さんは毎日を充実感を持って過ごされてゐる。といふことが「読み切って」に感じられた。

田中藤穂

何もせず酔芙蓉はやうす紅に
秋の雲脛に覚えのなき痣が
塩山駅信玄像の秋湿り

○今日も一日何もせずにゐる。酔芙蓉の〝うす紅〟は一日のどの辺りであらう。酔芙蓉にその紅が差してきた。「はや」と焦りの気持ちを表してゐる。酔芙蓉は挿木で増やせるとか。新芽が出る四月ごろ枝を頂きに行こうかしら。
○同感。わたしもいつの間にやら体のあちらこちらに痣が生じてゐるのだが原因は不明なのだ。こんな日常詠だが藤穂さんは遊び心がある。やましいことがある人を「脛に疵持つ」といふことわざがある。このことわざを逆手に取り、真っ当な暮らしをしてゐるのに覚えのない……、とうそぶく藤穂さん。「秋の雲」とは空っとぼけるにふさわしい無関係ぶりだ。
　ついでに脛では「脛が流れる」「脛から火を取る／脛より火を出す」「脛を掛ける」「脛を拾ふ」そして「脛を齧る」と脛は使はれたやうだ。
○「秋湿り」なる季語は見なれず一度も使へてゐない。『水瓶座』に「合掌造りの急な階段秋湿り」がある。見なれないといっても浅学をさらけ出すだけ。この季語、この句にはあまり作用してゐないと思ふ。

長崎桂子

連日の雷雨や秋の積乱雲
椋鳥は益鳥なれど荒すかな
手入れよき軒の鉢植秋団欒

○見事なまでのわがままな俳句だ。なにか桂子さんの気力を感じた。しかし私も立場上一緒になって面白がってはいられない。ここは一歩退いて「連日の秋の雷雨や四日市」ぐらいに季語を整理さ

れては。
○益鳥。害鳥は人間の勝手、鳥の与り知らぬところ。「なれど」は理が勝ちすぎるか。「椋鳥は益鳥といふ芝突く」とか。
○名詞に四季をりをりを付けると季語らしくなる。風や雨には違和感なく付く。人工物はさうはいかない。街・家にストレートに秋街・秋家とすると違和感がある。ここに〝の〟を挟むことにより秋の街・秋の家となり、違和感が薄まる。この句の秋団欒も〝の〟を挟んでみるとよい。

森なほ子

溝蕎麦の咲いてそろそろ三回忌
端の方ややあやふやなけふの月
一匹の馬追けふの客とする

○花の縁に鳥渡うす紅を差してゐる溝蕎麦。魅力的な花。その溝蕎麦の咲くにつれて思ひ出す人。佳き人である。静かで思ひの籠った作品。
◎どれだけの年月、どれだけの人が月を和歌発句に読み継いできたことだらう。しかしまだまだ読みやうがあるとは驚き感動した。俳句に興味がない人にはどこが良いのと云はれるだらう。本当に

説明が難しい。俳句でしか表せない世界かも知れない。
◎鳴く虫の中で一番姿が良いのはわたしの中ではスイッチョン。昨年昼日中に網戸にさかしまに止まってゐるのを見て興奮した。なほ子さんは沈着である。「客とする」に十二分に同感した。ただ残念なことは近年高音部の聴覚がどんどん衰へてゐる。今鳴いてゐるのは何の虫、と孫に聞かれても私には無音の草叢であった。

朝食は旅で　秋川　泉

基本的に朝食は採らない。食べると体が重くなり何かするのが辛くなる。故に朝昼兼用の昼食と夕食の二回にしている。ただし旅にあるときは朝食をしっかり摂る。なぜなら体が弛緩しても働く必要がないので安心してゆっくり朝食を採る。

発行　昭和37年8月14日
発行所　水音社
限定出版　一一〇部

野の蝶にたはむれ誰にも愛されず
光る時露のいのちのただならぬ
ほのかに遠く白息のみはめぐりあふ
春寒の肩をもみあひ皆職場へ
空笑ひする嬰兒よ春はそこらで爆ぜ
耕牛の片方の瞳に海のぞまれる
独りで酌む秋だなあ旅路
妻や旅す蚊遣のなつかしきひと巻
秋水の渦に巻きこむこころ或日
妻と子の白息くらべるかに見ゆ

子の數だけ買ふ蜜柑かえらびぬし
ゆく春の農夫泥田に足ぬきつつ
とみに夜涼黄色い帯の少女過ぎ
頬ずりは二兒に等しく夜長の妻
兒が寝る時凧は畳の上にある
闇を来る二つの咳は妻子の咳
鈍重な歩をうららかと思はしむ
子から妻へ妻から湯たんぽ足にて受く
樹々芽組みひかりあふるる少女の五指
醉うて教師夜のたんぽぽにののしられ

ビールさかしげ孤独の泡はこぼすまじく
海へ妻子夾竹桃の昼をねむる
満月に子を置き石鹸をとりにゆく
鶏頭親し海から帰って来た漁夫に
海峡に秋来てとづる腐食の錠
落ちる葉をすぐに焚火の量となす
秋の夜の感情の壁は二人で解く
一望黄に祈りに似たる千の藁塚
かへり花少年軍歌奏でて去り
日かげればすぐ南天に重さくる

朝食は二回

篠田純子

毎朝六時半に、粥を半膳食べる。タンパク質として、肉団子や卵を。野菜はトマトを入れ、おじや状となる。とりあえず三時間生きる為の、エネルギー源としての朝食である。十時ころ、一膳のご飯と焼き魚と汁ものをいただく。故に私の朝食は二回となる。

夫の出番

須賀敏子

数年前より朝食は夫の担当になった。紅茶とパンとジャム、ゆでたまご、ヨーグルトにバナナ、キウイ等。

パンの種類とジャムで少々の変化をつけるだけであるが、自分で作らないというのは何とも気が楽である。

やはり和食

大日向幸江

朝食はまず野菜ジュースをコップに一杯。その後はその日の気分次第。パン食だったり和食だったり、果物だけの事もある。

私の希望は普通の和食が良い。味噌汁・焼魚なんの変りもないご飯で好い。

朝はパン

長崎桂子

かれこれ三十年ほど前から朝食の主食はパンです。故にロールパンか食パン、オリーブ油、ジャム、チーズ、季節の果物、牛乳そして箸休めと煎茶を食後に必ずいただきます。でも一ヶ月に二、三回は御飯、みそ汁、卵料理、香の物にします。それはその日の朝の起床の時の体調で決めます。

ホットサンドメーカー

佐藤喜孝

鰥になってはじめて食事の支度をしてゐる。なにも出来ないので朝はパン、昼は麺、夜は飯とまづ決めた。パン食でいま凝ってゐるのはホットサンドメーカー。有り合せのものを挟むだけでおかずを考へなくて済む。キャベツを刻んでトマトをスライスしてマヨネーズ胡椒で準備終了。冷蔵庫に挟めるものがあれば追加する。これで温かい朝食がいただける。このホットサンドメーカーは夜も活躍する。餃子、お好み焼きと便利してゐる。私が買った唯一の調理器具である。

双葉

朝顔の双葉あまたに町工場　山荘　慶子

二間

方丈の二間くまなく秋灯　木村茂登子
あかあかと二間を灯し秋彼岸　田中　藤穂

二人

ことしまた母とふたりの桜狩　赤座　典子
青萩や女ふたりの謙譲語　芝　尚子
秋思あり男ふたりにたまご焼　佐藤　喜孝
今日からはお前と二人子猫抱く　鎌倉喜久恵
夕薄暑身ぶり手ぶりの二人かな　山荘　慶子
忠犬と二人の山荘水澄める　赤座　典子
ミレナリオ三百万人の二人なり　須賀　敏子
スキーのふたり網棚を長く占む　竹内　弘子
手をつなぐ宵のふたりや沈丁花　赤座　典子
ひとりより二人がよしと牡丹寺　堀内　一郎
ふと見ると影と二人の夏の旅　関口　ゆき
さ緑の残る茅の輪を二人連　芝　尚子
巫女ふたり浦安の舞さはやかに　堀内　一郎
一人ゐて二人目を見ぬ田植かな　佐藤　喜孝
僧二人花の下なる泡般若　鎌倉喜久恵
春の海若もの二人歩きけり　鈴木多枝子
母の日や男なればの母二人　赤座　典子
氷白玉老舗に喋り合ふ二人　芝宮須磨子
ふたりの母三人のはは合歓の花　堀内　一郎
白玉や用も無いのに二人きり　篠田　純子
日向ぼこ爺二人ゐて寡黙なり　須賀　敏子
老い二人雑踏に紛れ師走かな　芝宮須磨子
春の風湖に漕ぎ出す二人かな　長崎　桂子
背のびしてとどく夕虹ふたりして　佐藤　恭子
落し水見る老ふたり濁酒　渡邉　友七
冬ぬくし杖二人の路地を占む　赤座　典子
ストーブの音だけ聞いて二人かな　須賀　敏子
一人でも二人でもいい冬麗　須賀　敏子
遠野焼ひろがる中に人ふたり　竹内　弘子
銀座通り二人は暑しひとりゆく　堀内　一郎
西日中駄菓子屋に子のふたり程　芝　尚子
焼茄子や共に老いゆくふたりの餉　渡邉　友七
平行に生きても二人秋さうび　須賀　敏子
狐火を見しは五人のうち二人　田中　藤穂
照りかげる障子あかりのふたりかな　芝　尚子
何や彼やふたりになりし雑煮かな　堀内　一郎
耳遠き二人連れらし桜東風　田中　藤穂
四月生れの孫の二人と草の餅　芝宮須磨子
二人子の遠出を案じゐる四月　竹内　弘子
尼僧ふたり葉桜の間を見えかくれ　竹内　弘子

夕風や二人透きゐる青簾　田中　藤穂
紫陽花や九十才九十二才二人の店　須賀　敏子
唐傘をはみ出すふたり濃紫陽花　佐藤　恭子
つつがなく母ふたりあり金木犀　斉藤　裕子
二人ゐて一人の如し餅を焼く　堀内　一郎
母二人かはらずに居て去年今年　赤座　典子
膝かけを揃ってかける二人かな　山荘　慶子
かげろふや少年ふたり木の上に　田中　藤穂
ひとり居てふたりゐるかに新茶汲む　芝　尚子
自轉車に積む子はふたりみどりの日　鎌倉喜久恵
二人して素足投出し遠花火　堀内　一郎
一人去り二人去りたる小鳥来る　須賀　敏子
供花持つ人と二人に秋のバス　芝宮須磨子
女正月薬師参りの二人づれ　田中　藤穂
二人で漕ぐふらここや白い波　藤野　寿子
春耕の二人快速に手を振って　木村茂登子
亡き人と同行二人盆踊　須賀　敏子
二人きり無口になれば鉦叩き　木村茂登子
日向ぼこ一つベンチに二人づつ　田中　藤穂
蒼楓二人の会話近づき来　山荘　慶子
身の丈の暮しのふたり釣忍　芝宮須磨子
四世代目二人加はり夏座敷　佐藤　恭子
二合半を二人で酌みし二日かな　佐藤　恭子
可惜夜の櫻ながむるふたりかな　佐藤　恭子
入会地祖母と二人で蕨折る　篠田　純子
見映え良き少年二人霜の朝　大日向幸江
冬苺齢重ねし二人かな　山荘　慶子
一人居の屋敷に二人松手入れ　須賀　敏子
二人分薬仕分けり花辛夷　山荘　慶子
ふたりでは聞えぬものに荻のこゑ　佐藤　喜孝
菜の花や父の単車は二人乗り　斉藤　裕子
生身魂ふたり揃って入院す　篠田　純子
菊なます母とふたりで體重計　佐藤　喜孝
鴨の二人暮しを覗き込む　赤座　典子
二人暮し薯蕷漸う使切る　赤座　典子
一人よし二人またよし叩き鯵　竹内　弘子
五右衛門風呂二人で入る若葉雨　田中　藤穂
二人して声は大きく年の豆　斉藤　裕子
甜酒はふたりに限る初日の出　佐藤　恭子
せつかちとのろまの二人春の雲　斉藤　裕子
玉橋を日傘で渡りきる二人　佐藤　恭子
冬座敷今宵の客はふたり連れ　秋川　泉
初日の出年輪きざむ二人かな　大日向幸江
ペンキまみれの塗装屋二人年つまる　田中　藤穂
早苗植う山懐の二人かな　赤座　典子
七月よ二人を悼む永・巨泉　須賀　敏子

あとがき

句集『みづおと』について

発行年をご覧いただければだいぶ古い。袋とじ和綴のガリ版印刷である。序文は滝春一。画、刻、装釘を武井石艸、鉄筆を佐々木元三、製本を佐藤喜孝、編輯を中島白鴎、堀内一郎とあとがきにある。私の初めての句集である。うれしかった。一郎氏は大正十五年生。三十六歳、私は二十一歳である。

大切なこの句集を「アリエッティ」に気に入られてここ数年見かけてゐない。一郎さんのご息女敬子さんから必要な本があったらと声を掛けてくださった。写真の句集は一郎さんの遺品である。水音の句会は今はない戸山ハイツで毎月あった。帰りはみんなで藪に向かってショーペンハウエルだとおやじギャグを聴きながら他を憚ることなくツレションをした。その後新宿へ飲みに行くこともあったが、大概は酒の勢いで歩いて帰った。一郎さんの満月の句は良かったなあなどと反芻しながら。

来月号には私の作品を改作せず載せます。以下滝春一先生の「序」から少々抜粋。

「みづおと」のグループは
生活を楽しむように
俳句をたのしんでいる人達です（中略）
「みづおと」の作品を
たとえて云えば
山深い木群の底に湛えた
泉の音です（以下略）

私の俳句はこの時から何も変ってゐないことに気がついた。（喜孝）

二〇二〇年十一月号（2刷）
発行日　十一月十九日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）